

# 『情報モラルハンドブック』をつくろう

大阪市立阿倍野小学校 教諭 別所英文  
 キーワード：情報モラル、主体的な学び、協働的な学び

## 1. はじめに

近年、子どもたちの生活は大きく変化している。スマートフォンやタブレット端末、ゲーム機などを使ってインターネットに接続し、容易に複数の情報を得たり、SNSなどで間接的に会話したりするなど、その利便性に魅せられ、所持する子どもはどんどん増加している。しかし、便利な点だけに目が行き、そこから生まれる問題には気づきにくくなっているため、トラブルに発展する。このことは社会的な問題になっている。本校の児童においても例外ではなく、インターネット上に動画をアップしたり、SNSでの会話からトラブルが起こったりしている。インターネットの利用にはルールやマナーがあることをしっかりと理解し、うまく付き合っていくことが必要である。本実践で、このことをしっかりとらえさせたいと考えた。

## 2. 目的・目標

情報モラルの定着させるべき2領域5項目「情報社会の倫理」「法の理解と遵守」「安全への知恵」「情報セキュリティ」「公共的なネットワーク社会の構築」について子どもたちが主体的に学び、自分たちの生活に生かしていくことができるようにする。

## 3. 実践の概要

### 3.1 学年・教科

第6学年（2学級59名）・総合的な学習の時間

### 3.2 実践のねらい

#### (1) 自分ごととしてとらえる

インターネットやそれを利用する機器を使う場合の危険性について学び、そこから得た知識から、自分たちの身近な生活の中で起こり得る問題とその回避法を考えさせ、視覚的にわかりやすい方法で『情報モラルハンドブック』としてまとめ、より身近な問題としてとらえられるようにする。

#### (2) ひろめる

『情報モラルハンドブック』を作成したことを全校児童に集会で伝え、活用をよびかける。低学年にも伝えるという目的があるため、作る側も相手を意識した内容を考えることができる。

#### (3) 協働的な学び

ハンドブックの項目をグループで分担し、問題場面やその回避法について考え、作成していくことで自然にメンバーが話し合い協力し合う活動をすすめることができる。

#### (4) ICTの活用

(本校は、大阪市教育委員会「学校教育ICT活用事業」のモデル校の指定を受けている。3年生以上の各学年に40台ずつのタブレット端末と、各教室には電子黒板、実物投影機、画像転送装置が整備されている。) 情報モラルについて調べる活動においては、一人一台のタブレット端末を活用し、個別に詳しく調べられるようにし、『情報モラルハンドブック』を作成する段

階ではグループに一台のタブレット端末を活用して協働的に活動に取り組めるようにする。また、プレゼンテーションアプリや動画編集アプリなどのそれぞれのアプリを連携させ、『情報モラルハンドブック』の内容がより分かりやすく伝わるようにする。

## 4. 実践内容

### 4.1 情報モラルのスキルアップ

取り組みに先だって、インターネット・機器の利用に関するアンケートやインターネットの利用に関する意識調査を行った。結果からパソコンや携帯電話、スマートフォンを中心として所持率や使用率が高いことを確認させた。また、意識調査の結果から無料ダウンロードやイラストのコピーなど、自分たちでは大丈夫だと思っている行動の中にも危険性や間違いがあることも確認させた。その上で、情報モラルに関してのスキルをつけるためにアプリ「ネット社会の歩き方」(CEC)を活用し各自で調べ学習を行い、その後、それぞれが調べた内容について、全体でルールやマナーなどについて確認した。

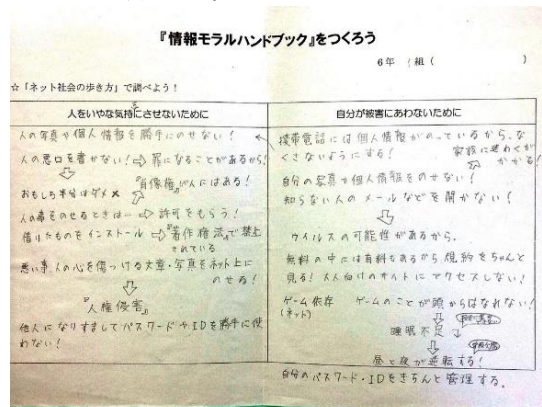


写真1 「ネット社会の歩き方」まとめ

### 4.2 『情報モラルハンドブック』作成

自分たちが調べたこと、知ったことを動画と文字を使い、プレゼンテーションアプリにまとめ、誰にでも内容がわかりやすく伝わるハンドブック作りを目指した。学級全体で項目【マナー、著作権、個人情報、不正アクセス、有害情報、ネット依存】について話し合い、グループで分担することにした。ハンドブックの構成は、①タイトル②項目に沿った内容で自分たちの生活の中で起こりそうな問題場面(フォトムービー)③その問題に対して気をつけなければならない点、守らなければならない点を文章化(スライド)の3部とした。



写真2 問題場面

**やくそく!!**

- 勝手に人の情報を流さない!
- 人をいやな気持ちにさせない!
- 自分もいやな気持ちになる
- (とまべくんの様に仲間はずれにされるかもしれません)
- 人の悪口を言わない!

写真3 守るべき点

問題場面の作成では、まず表現したい場面をグループで相談し構成表にまとめる。そこから、パソコン教室に行きメールを送っている場面を撮影したり、架空のサイトに見せかけた画面を作成したり、保健室のベッドを使用させてもらったりするなど、児童なりに生活の中により近い場面を撮影しようと工夫していた。動画にまとめる際もマーキングで言葉や図を加えてより臨場感を出そうと工夫することができていた。実際に経験したことを表現しようとするグループもあった。

場面	ナレーション等	文字	画面	ナレーション等	文字
メールのやり取り	このメールを自分宛てに送ってきたのは、友達から来たメールだ。	① 友達から来たメールの画面	② 友達から来たメールの画面	③ 友達から来たメールの画面	④ 友達から来たメールの画面
友達から来たメール	友達から来たメールの画面	⑤ 友達から来たメールの画面	⑥ 友達から来たメールの画面	⑦ 友達から来たメールの画面	⑧ 友達から来たメールの画面
友達から来たメール	友達から来たメールの画面	⑨ 友達から来たメールの画面	⑩ 友達から来たメールの画面	⑪ 友達から来たメールの画面	⑫ 友達から来たメールの画面

写真4 構成表



写真5 メールを送っている場面

途中、グループ間での交流を行い、アドバイスを送り合い修正を加えるようにした。できあがったハンドブックは学年全体で交流し、それぞれのハンドブックの情報モラルについて考えるとともに他のグループの工夫点などを認め合う機会とした。



写真6 表紙



写真7 目次

#### 4. 3 全校集会での紹介

完成したハンドブックを全校児童に紹介するために、グループごとにそれぞれの内容について簡潔に動画でまとめた。それぞれのグループが作った紹介動画をまとめ、全校集会で『情報モラルハンドブック』について紹介し、活用してもらうことを呼びかけた。



写真8 全校集会での紹介

### 5. 成果

ハンドブックを作成する活動を通して、グループ内の子どもたちの協力がよく見られた。自分たちが考えたことをわかりやすく表現しようと、どんな場面を写真にするか、どのようなナレーションにしたらいいのか、もっとわかりやすくするためにはどうしたらいいのかをタブレット端末を囲みながら、みんなが活発に話し合い、活動に取り組むことができた。普段の授業では発言が目立たない子も、自分の意見をしっかりとっている場面をよく目にする事ができた。

また、低学年にもわかるようにするために、漢字にはよみがなを付けたり、紹介ビデオでは難しい言葉を少しでもわかりやすく伝えようとするなど、相手を意識することもできた。

その後の子ども達の会話の中で「それは著作権があるから、勝手に使ったらダメや。」とか「昨日のメールの内容はよくないな。やめてや。」とか聞かれるようになり、自分たちが主体的に行った学習の内容を少しずつ意識し生活の中に生かしていくことができたと考えた。

今後、この6年生が残っていた『情報モラルハンドブック』を活用して、後輩たちが情報モラルについて学び、意識をし、安全に気持ち良く情報に関わることができるように指導を継続していきたい。「機械の向こうには人がいる」、このことを常に考えることのできる子どもたちを育てていきたい。



写真9 協働的な学びの場面